

冬の新宿御苑

後藤菊子

十一月の下旬、久し振りに新宿御苑に行つてみた。新宿門から入ると、モミジバスズカケやユリノキの大きな樹々が葉を落としていた。落ち葉を踏みしめながら歩くのは何とも楽しい・・・。

園内マップを見ながら歩いて行くとラクウショウの林に出た。御苑のラクウショウの膝根は見事である。まるで童話の世界に入つたような気がした。

沼杉の氣根ざわざわ冬初

ここから「母と子の森」に入つてみた。クヌギ、コナラ、イヌシデなどの雑木林になつてをり沢山のドングリや色とりどりの落ち葉が観られて嬉しい・・・鳥達の声が賑やかだ。少し細い径に入るとか動物に出会えそうな気がした。

雜木落葉不意にざわめく獸道

広い道をのんびり歩いて行くとフユザクラが咲いていた。淡いピンクの花びらのフユザクラはいかにも寂しげである。でも「ここに咲いていますよ」と語りかけているように思えた。

自分史をぽつりぽつりと冬桜

中の池を渡ると芝生広場に出た。カツラが少し黄葉を残していた。空を見上げると飛行船がかなり低くゆつくりと冬空を飛んでいた。一度飛行船に乗つてみたいなー等と思いながら少し行くと旧御涼亭に出た。

暗い感じのこの館は寒々していてやはり夏の涼を楽しむ館である。外に出ると少し肌寒くなってきた。

御苑の至る所にはサザンカが咲いているが御涼亭の近くにもサザンカが咲いていた。私は白いサザンカが好きだ。サザンカは咲きながら散るという感じがする。儘さの中にも美しさあるのが何とも言えない。特に地面に散った白いサザンカは美しい・・・。 淡い冬の日差しが樹々の影を長くのばし始めていた。今日もステキな一日を過せた。

うすうすと大樹の影や冬の苑

皇居東御苑

後藤菊子

まだ寒の内の一月下旬、天皇皇后両陛下のお住まいになつてゐる皇居の一角にある皇居東御苑に行つてみた。かつては將軍の居城であつた本丸と二の丸、三の丸の跡地を整備した六万四千坪の広大な公園は、皇居全体の三分の一にあたるそうだ。

まず門を潜ると八双金物や乳金物を使つた頑強な大手門を渡り、櫓が目に入つた。屋根のてつぺんでは大きな鰐が睨みをきかせていて、反対側の白壁には方形の矢狭間が並び、真青な寒の空が見えた。

大手門矢狭間に小さき寒の空

しはらく歩くと、時代劇でよくみる番所が同心番所、百人番所、大番所と続き、幕府の警備の厳重さを感じた。

冬の日差しの中のんびり歩いて行くと、昭和天皇の御発意で造られた二の丸雑木林に出た。やや風はあるものの冬枯れの雑木林は明るく、小鳥達の声が心地よかつた。その先には美しい日本庭園が広がつていた。九代将軍家重の時代の絵図をもとに池泉回遊式庭園として復元されたこの庭園には、カンツバキが咲き鎮まりかえつっていた。曲がりくねつた道に沿つて行くと梅林坂にてた。太田道灌の時代には数百本の梅が咲き乱れていたそうだが、今は五十本ほどの梅がちらほら花を付けていた。坂を登りきると天守台にてた。天守閣は明暦の大火で焼失してしまい、その後再び造られる事はなく、八代将軍吉宗によつて再建された天守台だけが残つていた。天守台を下りると広大な芝生広場に出た。今は冬の日差しに眩しい枯れ芝になつていたが、かつては本丸御殿、大奥御殿が建つたであろうことが偲ばれた。

柏芝に白き闇あり坂垣かな

薄ぐらい道を行くと日本や中国の珍しい竹や笹が植えられていた。その先には石室や有名な松の大廊下跡があり、松が植えられているだけであつたが見物人は多かつた。松の周辺には寒さにも負けず常緑のナキリスゲが観られた。

寒菅や武士（もののふ）の声はるかなる

当事を想いながら歩いて行くと野草の島に出た。センリヨウ、マソリヨウ、ヤブコウジ等が実を付け、ミヤマウグイスカラが可愛らしい花をつけ、シナマンサクやボケも花を咲かせ始めていた。ここからは本丸地区に現存する唯一の櫓で、遺構のなかでは最も古いものと言われている富士見櫓が見られた。少しの間であつたが、江戸時代にタイムスリップ出来て、楽しい一日でした。

春の谷津田へ

後藤菊子

この東日本大震災の被災地の方々には心よりお見舞い申し上げます。被災地の方々の事を思うと、何となく遠くに出掛ける気持ちにはなれず、久し振りに近くの谷津田を歩いてみました。

幸いこの付近は地震の被害はほとんどなく何時もの美しい谷津田の景色が見られました。

田圃は既に起こされ、深呼吸をしているようでした。畦道の柔らかい日差しの中にはノビル、オオイヌノフグリ、オランダミミナグサ、カラスノエンドウなどが、また田圃の中にはタネツケバナ、タガラシなどの野草達がはびこっていました。ノビルを引っ張つてみると、可愛い鱗茎が見られノビルの良い香りと土の匂いが鼻をつきました。

やはらかき土こぼしつつ野蒜引く

農道を歩いて行くと、キチヨウの番が元気良く飛んで来ました。

地震きりて黄蝶荒々しく飛べり

さらに行くとこの付近の鎮守社があり、この度の地震が嘘のように静まり返っていました。一日も早い被災地の復旧、復興を祈り社の裏手にまわつて見るとオドリコソウがやわらかい葉を大きく広げていました。

堂裏に風をいとひて踊子草

もう少ししたら、可愛らしい花が見られるのを楽しみに社を後にしました。そして向かい側の森にも久し振りに入つてみました。メジロ、ホオジロ、ウグイスなどの声を聴きながら森をゆっくり歩いて行くと、萌黄色の木々の芽が何とも美しく輝いていました。良く見てみると近くの小学校の生徒達が作ったのでしょうか、森の所々に番号のついた鳥の巣箱が掛けてありました。うまく鳥達が使ってくれると良いのですが・・・

番号の付きし巣箱や雑木林

まだ明るく気持ちが良かつたので、帰りものんびりと家まで歩いてみました。

バス停を三つ歩いて春の暮

久し振りに落ち付いた一日でした。

船橋 寺町界隈

後藤菊子

五月の下旬、船橋の寺町界隈（本町三丁目辺り）を歩いてみました。エネルギー・シユな船橋駅前を抜け十分ほど歩くと、懐かしい街並がつづく寺町に出ました。

最初に詣でたのは淨勝寺：この寺は江戸幕府から朱印地を与えられ、この界隈では一番大きな寺院でした。この寺には江戸時代歓楽街があつた頃、薄幸な運命に翻弄された遊女達を祀った「お女郎地蔵」があり、曇り空になんとも寂しげでした。

卯の花雲り供華一輪の遊女の碑

隣りには船橋幼稚園が併設されていて、若葉が眩しいグラウンドで園児達は元気いっぱいに走り回っていました。

園児らは言葉惜しまず柿若葉

淨勝寺を出てさらに細い迷路のような道を行くと、不動院という寺に着きました。この寺は山門を潜るとすぐの所に、江戸時代（1746年）この界隈を襲つた津波で溺死した、漁夫や住民を供養する為に建てられた「石造釈迦如来坐像」が鎮座していました。その後の漁場争いで入牢し栄養不良で獄死した漁師達を悼み、毎年二月二十八日 この大仏様の体に白米の飯粒をつけて供養するそうです。この大仏様は「飯盛地蔵」とも呼ばれ市の指定文化財になっています。

さらに路地を行くと圓蔵院に着きました。願い事が叶うことで知られる「因果地蔵尊（石造地蔵尊）」がお堂の中にあり受験シーズンには学生達で賑わうとの事でした。すぐ側には覚王寺があり、昔から海上の守護神「龍神様」として人々の信仰を集めている寺で龍や仙人、仙女の彫り物が見事でした。路地を歩いていると簾の掛つた木造の町屋もまだ残っているし、この町には一軒もの銭湯がありその煙突の高さが目立ち、とても懐かしい街並でした。

船橋に昭和のありて青簾

寺町の湯屋の煙突炎花

路地を抜けて東の方に行くと、船橋の中心を流れる海老川に出ました。春には海老川沿の桜並木が見事だそうです。その橋の中に「海老川橋」という橋があり、昔海老川の河口に小さな漁船を並べて橋の代りにして渡つたという事から、船橋という地名がついたといわれている地名発祥の地だそうです。

船橋には何回か来ていますが、この寺町界隈を歩いたの初めてで、新しい発見が沢山ありました。楽しい一日でした

都川に沿つて

後藤菊子

梅雨の明けきらない六月の下旬、千葉市内を流れる都川沿いを、水源橋辺りから歩いてみました。句友達とは「みやこ図書館」で集合しましたが、梅雨の晴れ間の図書館は割合混みあつていました。

ひそひそと図書館の隅黴匂う

早速、図書館を出て都川に沿つての吟行に出掛けました。街中を流れる都川は少し濁つていて、水底には自転車など色々な芥が沈んでいました。川の淵にはボラの稚魚が群れ、鯉も多く観られました。

鰯群るる雨意の風よぶ都川

水源端の向こう側には矢作トンネルが通つていて、その上は千葉大医学部の校舎が建ち並んでいました。

さらに川沿いを行くと昔からの街並が続き、手入れの行き届いた生垣の間からトケイソウが独特な形の花を咲かせていました。川は丁度、引き潮の時間でした。

時計草潮引きはじむ都川

川沿いの家の庭にはそれぞれ個性的なガーデニングがされ、色とりどりの花が眩しいほどでした。新旭橋を少し民家の方に曲がると、空き地になつていてエノコログサやムギクサが繁茂していました。

麦草生ふ空き地の砂の乾きかな

細い路地裏を出て再び川沿いを行くと、ナツグミとクワの木があり、たわわに実を付けていました。一つ頂いてみると、どちらも甘酸っぱくとても美味しかった・・・

亀岡橋辺りから遊歩道になつてをり、その先には県庁のビルが大きく見えてきました。日陰がないので汗ばんできましたが、本町公園に着きやつと一息つけました。ベンチに越し掛けて皆で俳句の推敲を始めました。犬を連れて散歩に来ている人達もいて、公園はけつこう賑わっていました。

緑陰の風筋犬も加はりて

千葉の駅前の賑わいとは違うこの界隈は、とても懐かしい街並でした。

これから梅雨が明けて本格的な夏を思うと少し気がめいりますが、やはり夏のからつとした青い空を思うと楽しくなりました。

昼食後の句会は「キボール」の涼しい研修室で始まりましたが皆、気持ちが昂ぶるつていて部屋は熱氣でむんむんしていましたが楽しい句会でした。

市内の表通りはよく歩きますが、少し奥に入るとこんなにも懐かしい町並がある事が判り楽しい一日でした。

中山法華経寺

後藤菊子

暑さも落ちついてきた九月の下旬、中山法華経寺を訪ねてみました。

JR下総中山駅を出て緩い坂道を行き千葉街道を越すと、すぐに総門（黒門）が見えてきました。

ここからは法華経寺の参道になつていて、間口の狭い懐かしい感じの店が建ち並んでいました。

少し行つた右側には清華園と名付けられた庭園があり、市川市が管理しているようですが、あまり手入れがされていない様で、秋草が生い茂っていました。参道をさらに行くと立派な山門（赤門）に出ました。かつては朱塗りの美しい門であったようですが、今はその色がなくかえつて風情があり清々しい感じがしました。大きな眼の仁王様が睨みを利かせていました。

清秋や仁王の眼空くうを射る

山門を潜り石畳を行くとすぐ左側に搭頭の一寺池本寺があり、この寺でも荒行が行われたようでした。（十一月一日から翌年の二月十日までの百日間）

今は荒行堂の扉もぴしつと閉ざされ鎮まりかえつていました。その鎮けさの中をクロアゲハが一頭、荒行堂の前をすーっと飛んで行きました。

秋の蝶荒行堂を低く飛び

その手前には徳川家から寄進されたという三つ葉葵の紋の入った、荒行の時の水行に使う水盤が三つ並んでいました。二つは土が入っていましたが、一番大きい水盤は空っぽで秋の日が差し込んでいました。

荒行の水盤の潤れ秋日濃し

ここを出てさらに石畠を行くと、左側に本阿弥光悦の分骨墓がありました。江戸時代初期の大芸術家にふさわしい立派な墓碑でした。因みに山門、祖師堂堂、法華堂などの扁額は光悦の筆によるものだそうです。

その先の真っ赤な竜淵橋（この橋の欄干は擬宝珠ではなく、鬼子母神の象徴である柘榴の果実です）を渡ると立派な五重塔（重文・江戸時代初期）、露座の大仏（江戸時代中期）、比翼入母屋造こけら葺の祖師堂（平成十年に復元）、法華堂・四足門（室町時代）と歴史ある建物が建ち並んでいました。境内にはケヤキ、ムクロジ、スダジイなどの古木が多くさらに風情がありました。

日頃修行などとは、ほど遠い生活をしている私は、法華経寺にお参りして、僧侶の皆様の立居を拝見していたら、毎日の暮し方を少し見直さなくてはと思つたりもしました。

作務衣僧の美しき立居や新松子

は

しんぢぢり

車山高原

後藤菊子

十月の下旬、バスで長野県の車山高原から諏訪湖方面に出かけてみました。東京を抜け山梨県に入ると、バスの窓から見える山並みは千葉県とはだいぶ違う景色になつてきました。今年は少し紅葉が遅いのかなーと思いつながら窓からの景色を楽しみました。インターを下りると、村（町）が点在していて、干し柿を作っている家々があり何とも美しい景色でした。

過疎村の風にあまさや柿簾

車山高原までの山道はどちらを向いても芒原が一面に広がっていて、光の中で揺れている穂芒はとても幻想的でした。展望リフト乗り場には、葉を落としたナナカマドの真っ赤な実が青空に映えて何とも言えない美しさでした。頂上までのリフトでうけた風は本当に爽やかでした。

山頂から見た八ヶ岳連峰・富士山・南アルプス連峰などの峰々は、まさに絶景でした。頂上には大小の石を積み上げたケルンが、秋の日差しの中に幾つかありました。

頂上やケルンに秋の日矢させり

そして、マツムシソウやリンンドウ・ウスユキソウなどが見られるかと思つて楽しみにしていましたのですが、少し時季が遅く、どれも咲き終わっていたのが残念でなりませんでした。形のままに枯れ残っていた草花は又一味違う風情がありましたが・・・

高嶺草みな枯れ残り夕日中

予定より大分遅くなつたので急ぎホテルに向かいました。ホテルは諏訪湖の目の前にあり湖を一望出来ました。

翌朝、湖には鴨類を始め、沢山の渡り鳥が、湖面にのんびりと遊んでいるのが見られました。尾長鴨の優雅な姿は格別でした。

尾長鴨湖の余白に遊びをり

朝食の後は近くの高島城まで散策しました。「浮き城」と呼ばれていたこの城は、かつて諏訪湖の中に浮く水城であつたとのこと・・・今は町の中心に復元されていて、敷地内には見事なカツラの大樹が一面に葉を散らし、心地良い香りを放っていました。

その後、諏訪大社本宮を参拝しました。日本三大奇祭の一つで、七年毎に行われる御柱祭は見られませんでしたが、全国の一万余社を数える諏訪明神の総本社だけあって、その莊厳さには圧倒されるほど見事なものでした。初めて訪れた諏訪の街は風情のあるステキな街でした。

師走の浅草

後藤菊子

十二月も押し迫った日曜日、久し振りに浅草に出掛けてしまいました。

地下鉄を上がるともう其処は賑やかな懐かしい浅草の街でした。

雷門通りをはじめ街中には門松などが立ち、もうすっかり新しい年の準備が済み下町の情緒がいっぱいでした。人力車の車夫の方々、老舗の若旦那など今年流行の髪型（短髪のトンガリ髪）がとても粋でした。

門松や老舗の主流行り髪あるじ

ここ浅草は江戸時代の頃浅草寺を中心に門前町として栄えその後、浅草寺の裏には見世物小屋、芝居小屋なども並び賑わい、大正、昭和にかけては興行街として浅草六区など大衆娯楽の発信地として発展してきました。

風神、雷神の控えている雷門を潜ると仲見世に出ました。

仲見世は人・人・人で大賑わいでした。食べ物を扱っている店は特に大繁盛でしたが、中には「ひやかし」の客（特に男性）も多くいました。

人波が街動かして師走かな

ひやかしの男煤逃げかもしねぬ

伝法院（庭を見学できなくて残念）を過ぎ、本堂（観音堂）・五重塔に出ました。本堂は参拝客でごつた返していくお賽錢をあげる事も、ままならないほどでした。今年も無事に過せたお礼と、来年は穏やかな年になる事を祈りました。

本堂裏での歳の市（ガサ市）、羽子板市は残念ながら終っていて、がらーんとした広場には一面に柔らかな冬の日差しが射していました。

ガサ市の果てて日差しの遍しや

この本堂の東側にある浅草神社は推古天皇の時代に隅田川で漁をしていた二人の兄弟漁師が觀音像を拾い上げ、それを郷士と共に祀ったのが始まりだと伝えられています。毎年五月に行われる「三社祭」はそれは賑やかで子供の頃からとても楽しみにしていました。

また最近ここからは川向こうの「スカイツリー」が目の前に見えて、また一つ名所が増えたような気がしました。

子供の頃から良く来た浅草は昔と少し変わりましたが、まだまだ老舗が沢山残り下町の人情が感じられとても楽しい街でした。

*煤逃げ（すすにげ）・・・

暮の煤払い（大掃除）を手伝わないで何処かに出掛けてしまう事）

深川へ

後藤菊子

天候が不順な三月の上旬、久し振りに東京の深川を句友達と吟行しました。地下鉄東西線の門前仲町駅を上がると、すぐ前が深川不動の参道で佃煮、煎餅、和菓子などの店が並び参拝客で賑わっていました。

深川にそぞろの神や春の雲

参道の途中にある永代寺には不動尊が奉られていて、この寺は元禄時代に成田山から出開帳したのが始まりだそうで、現在の堂宇は戦後の再建だそうです。

少し行くと富岡八幡宮の一の鳥居に出ました。祭神は応神天皇が主神です。

三年に一度の八月の本祭りは神輿五十基あまりの連合渡御が行われ、神輿に水をかけるので「水かけ祭り」ともいわれ、街を挙げての賑わいとなるようです。

境内には横綱力士碑があり歴代横綱の名前が刻まれていました。その高さと厚さには圧倒されました。

皆と離れて少し歩いてみると、門前町は路地が多く方向音痴の私は地図を見ていても迷子になりそうでした。

春昼や絵地図に迷ふ門前町

清澄通りに出て法乗院閻魔堂に参り、さらに北進すると仙台堀川の橋の袂に杉山杉風（芭蕉の高弟）の別荘跡（採茶庵跡）があり、濡れ縁に腰掛けている芭蕉像がありました。芭蕉は尊敬する西行・李白・宗祇にならい「そぞろ神」に誘われ旅に出たい気持ちになつたと「奥の細道」の冒頭にも書かれています。

芭蕉は深川の自分の草庵を人に譲りここ「採茶庵」から舟で千住に出て「奥の細道」の旅に出たようです。

深川には芭蕉像がいくつもありますが、杖を持ち旅装束の芭蕉像の眼差しは遙か「白河の関」に想いを馳せているように見えました。

それからすぐ側の「清澄庭園」にも寄りました。全国から集められた庭石の美しさは格別でした。池には大好きなキンクロハジロ、オナガガモ、ホシハジロ、カルガモなどが、のんびりと泳いでいて都心とは思えない景色でした。浅瀬には葦の卵塊が沢山産みつけられ、暖かくなるのを待つていていました。

皆さんと合流して昼食は名物の「深川飯」を頂こうと、こじんまりとした店に入りました。店には聞き慣れない音楽が流れていきました。江戸時代に流行った「新内」でした。テープでしたがなんとも風情がありました。

新内の流れる店や春時雨

昼食後、芭蕉の気持を思いながら、小名木川を渡り句会場に向かいました。

小名木川渡れば過客春の風

そぞろ神・旅に出るよう誘惑する神様で芭蕉の造語のようです。

初夏の野呂町周辺

後藤菊子

五月の上旬、自然観察の仲間の方々と野呂町周辺を探訪しました。

千葉駅からバスで芳賀で降り、まず妙興寺に寄りました。市内最古と云われている日蓮宗の名刹です。開祖は日舎上人で、江戸時代には立派な壇林も在つたといふことです。剥落している朱の山門を潜ると、落慶まだかな白木の子安堂がとても清々しく、本堂前には日蓮聖人の凜々しい像が建っていました。その昔、泉自然公園から移植したと云われている枝垂桜はすでに葉桜に・・・

山門の朱の剥落や花は葉に

そこから一〇〇メートル程の所に「お杖桜」と呼ばれている桜の古木がありました。日蓮聖人がこの地を訪れた時、さしおいた杖が根付いたとか・・・

さらに少し歩くと一面の早苗田に出ました。鶯や蛙の声が聞こえ、畦にはオオジシバリ、ケキツネノボタン、タガラシなど沢山の水田雑草がはびこり、日本の原風景という感じでした。早苗田に沿ってのんびり歩いて行くと、林縁にはウラシマソウ、イタドリなどが群生していました。

三〇分程で上人塚に着きました。日舎上人を始め妙興寺累代の上人の墓碑が並び、シラカシなどの常緑樹の落葉が散り、シキミの花もひつそりと咲き残り、苔むした墓碑には時の流れを感じました。

風止みし上人塚や夏落葉

ここから五分ほど行くと、妙興寺の下寺で不動明王が祀られている慈眼寺（清水不動尊）に着きました。不動明王に祈ると三毒（貪欲、瞋恚、愚痴などの煩惱）を取り除いてくれること・・・本堂の前の階段を降りると清水が染み出でていて、近くにあるツヅジの枝に清水をつけて疣を洗い淨め不動明王にお願いすると、疣が取れると云い伝えられ、「疣とり不動」とも呼ばれています。私などは凡人なので・・・

三毒を断てず泉に口漱ぐ

早苗田を両側に見ながら細い坂道を上り六社神社に向かいました。この神社は鎌倉時代の創建と伝えられ、大国主命を主神として境内には「疱瘡神」「天満宮」「第六天」「馬頭観音」「安房栖大明神」「稻荷神社」の六柱の神様が、それぞれ小さな祠に祀られています。スダジイやスギの巨木が林立していて、特に三本杉の古木には、かつて近隣の人達の打つた「呪いの釘」の痕が幾つか見られ、なんとも不気味でした。

老杉に呪いの痕や鳥雲に

六社神社を後にして、泉自然公園で初夏の植物を見ながら昼食となりました。

猛暑の街

後藤菊子

今年は梅雨が明けた頃から猛暑が続き、熱中症等が心配されていましたが、この暑さのお蔭で、今年も我が家家の猫の額より狭い庭にはウマノスズクサが沢山生え、ジャコウアゲハがやつと産卵しに来ました。朝のひと時の観察が日課になりました。

五～六頭位のジャコウアゲハが五日間位の間に五十個ほど産卵しました。一週間位で孵化が始まり、幼虫は旺盛な食欲で、どんどん大きく太くなり二十日位で蛹になりました。最終的には何頭のジャコウアゲハが飛びたってゆくのか楽しみです。

この日は観察の後、大百池公園に向かいました。途中にケヤキ大樹のある旧家がありその下に大きなぶち猫が、うさん臭そうな目をしてどつしりと座つてこちらを睨んでいました。

ぶち猫のすね者のごと木下闇（こしたやみ）

通りに出ると道路工事をしている所がありこの猛暑の中、本当に大変な仕事です。人々と作業をしていらっしゃる方々には頭が下がります。熱中症にならないように祈るばかりでした。

炎屋や工事現場のみな無口

三十分ほど歩くと、田圃や畑が広がり農家の方々はその周りの草刈をしていました。今は草刈り機を使っていますがこの暑さの中、大変な作業です。私などはあまりの暑さに大百池の森に入りました。森の二ヵ所のイチヤクソウをチェックしました。被さつている落葉などを除けてみると、株が大分増えて来年も楽しみです。それから、ツバキに寄生しているヒノキバヤドリギも観に行つてみました。こちらはあまり増えていないので少し心配です。

大分歩いたので少し疲れました。切り株に腰を下ろして水分補給・・・

ところと真屋の疲れ八重梶子（やえくちなし）

森を出て農道を歩いて行くと草刈を終えた農家の方々が草刈り機を止めて一服していました。

草刈り機止みて薄暮の風豊か

家までの道は来たときより少し涼しくなってきたので、ゆっくり景色を楽しみながら帰りました。家に着くと暑さに強いといわれている猫もさすがに夏バテをしたようで少し痩せたような感じがしました。

夕方濡れ縁に出て猫の「寅吉」と並んで端居をしました。

面痩せの猫と並びて夕端居（ゆうはしい）

※ 夕端居・：夕方、室内の暑さを避けて縁先など風通しの良い所で涼をとる事

上州の風

後藤菊子（千葉市）

八月の上旬、句友八名で群馬県綾戸の鮎の簍漁を見物に行つた。前日からの台風の影響で水嵩がまし、鮎の簍漁は見学出来なかつたが、鮎づくしの昼食は皆でおいしく頂いた。車窓から上州の自然を楽しみながら早目に宿に着き句会、夕食の後、丁度宿の町内の盆踊りが始まつていたので皆で踊りの輪に入れて貰つた。

踊りは小さい時から苦手だつたけれど・・・

大振りに踊りて旅の盆踊り

全員汗びっしょりになつて楽しく踊らせて貰つた。

翌朝は車で「吹き割りの滝」に向かつた。時々テレビで見るこの滝は東洋のナイアガラと呼ばれているだけあつて、水量とその雄大さには圧倒された。

轟然と地を割り裂きて滝落つる

滝の周辺は遊歩道になつていてハエドクソウ、キクイモ、キキョウなどが群生していた。マイナスイオンとフィトンチットを全身に浴び、ゆっくり遊歩道を散策した。

その後、車で三十分ほどの所にある「吉祥寺」という由緒ある禅寺に参つた。鎌倉の建長寺を本山とする南北朝時代（一二三二九年）に創建された臨済宗の禅寺である。

一八一五年に建立されたという山門の桜上には文殊菩薩を中心に十六羅漢が安置されていた。桜上に登りお参りさせて頂いたが、それぞれのお顔はどれも凜々しいお顔立ちであつた。

一六七五年に再建された本堂は、一〇八坪という広さで禅寺にふさわしい質素な造りで欄間、仏像なども禅の精神と威厳に満ちていた。

本堂の片隅で冷たい抹茶を頂いた。

白桔梗禅寺で享く薄茶かな

本堂の庭には「昇龍の滝」「青龍の滝」という自然を生かした滝があり、流れ落ちた池には見事な錦鯉が泳いでいて爽やかな風を受けながら水音を聴いていると時間がたつのを忘れてしまつた。池から出た小流れは寺領の周りをさらさらと走つて行つた。

禪林の小流れ速き春秋かな

寺領の至る所に手入れの行き届いたキキヨウ、オミナエシ、ホトトギス、ユキノシタなどの花々が咲き、オニヤンマ・シオカラトンボ・イトトンボ・マユタテアカネなどが飛び交い本当に美しい景色だった。

上州の風に乗りくる鬼やんま